

「な……っ……？！」

いきなりその紐帯でこちらの目を覆い、後頭部にまわした帯の両端をしっかりと結んでしまった。

眼前に広がるのは暗闇だった。

そもそもが日が沈んで御堂の中が薄暗くなっていたから、こんなことをされてはいよいよ何も見えなくなる。

そんな中でも男たちの舐めまわすような視線だけは感じられて、どこも触れられてないというのに、ざわざわと軀のあちこちが粟立った。

「これから僕たちが、順番にお前のこと可愛がってあげる。お前は誰が相手をしてくれているのか、当てればいい」

「……ッ！？」

そんな若い男の声が聞こえながら、誰のかもわからぬ両手に、腰骨をとらえられた。

「誰なのか当てられたら、お前の勝ち。けど、もし外しちゃったら……そうだなあ……どうしよっか？」